

階層モデルにおける3つの水準の動機づけと学業達成との関連

○梅本貴豊（京都外国語大学）

稲垣 勉（鹿児島大学）

キーワード：階層モデル、動機づけ、学業達成

問題と目的

動機づけを捉える1つの視点として、3つの水準（全体、文脈、状況）を仮定するVallerand & Lalande (2011)の階層モデルがある。学習場面においてこれを参考にする、全体レベルの動機づけとは、学校での学習全般に対する動機づけを意味する。文脈レベルの動機づけは、特定の教科や科目に対する動機づけと位置づけられる。状況レベルの動機づけは、特定の授業や課題への取り組みにおける動機づけを意味する（鹿毛，2013）。これまで階層モデルに沿っていくつかの研究が行われているが（e.g., Guay et al., 2000; Núñez & León, 2018），3つの水準の動機づけどうしの関連や、3つの水準の動機づけとアウトカムとの関連の検討は不十分である。

そこで本研究では、大学生の学習場面を対象とし、縦断的な調査を通して以下の2つを検討する。1つ目は、3つのレベルの動機づけ間の関連の検討である。特に、全体レベル（Time 1；以下T1）から文脈、状況レベルへの影響（top-down effect）だけでなく、文脈、状況レベルから全体レベル（Time 2；以下T2）への影響（bottom-up effect）についても検討する。2つ目は、3つの水準の動機づけと学業達成との関連である。本研究では、文脈レベルにあたる、授業成績を取り上げる。

方 法

調査対象者

1つのセメスターにわたって、2つの大学（3つの授業を対象）の計168名の大学生を対象に縦断的な調査を実施した（平均年齢20.10、標準偏差1.33；A大学79名、B大学89名）。

調査内容

全体レベル 岡田・中谷（2006）の尺度を用いて、自己決定理論の4つの動機づけ（内的調整、同一化調整、取り入れ調整、外的調整）を測定した（34項目、5件法）。T1はセメスター2もしくは3回目の授業で、T2は最終授業で実施された。

文脈レベル 岡田他（2013）を参考に、「この授業科目に対するあなたの学習意欲について教えてください」という項目を作成した（7件法）。セメスターの毎回の授業で実施され、それらの平均値を指標として用いた（9回以上の調査に参加した学生のデータのみを使用）。

状況レベル 梅本・稲垣（2019）を参考として、特定の授業中の「授業開始時、開始15分後、30分後、45分後、60分後、75分後、授業終了時」の7時点について、状況的動機づけを測定した（7件法）。それらの平均値を指標として用いた。

学業達成 セメスター全体における学生の授業への取り組み、レポート、テストなどから総合的に計算された授業成績を使用した。分析にあたっては、授業ごとに値を標準化した。

結果と考察

全体的動機づけ（T1）から状況的動機づけへのパスを仮定したモデルと、それらのパスを仮定しないモデルを比較したところ、後者のモデルの方がよりよい適合度を示したため、そのモデルを採用した（CFI=.926, RMSEA=.130 [90%CI: .093-.169], SRMR=.052; $N=96$; 大学を統制）。

分析の結果、文脈的動機づけに対しては、内的調整（T1）から正のパスが（ $B=0.333$, $SE=0.122$, $p<.01$ ）、外的調整（T1）から負のパスが見られた（ $B=-0.206$, $SE=0.105$, $p<.05$ ）。大学の学習に対する「楽しい、面白い」という動機づけは、特定の科目の動機づけを促進するが、外発的で他律的な動機づけは、逆の効果をもたらすことを意味する。次に、状況的動機づけに対しては、文脈的動機づけから正のパスが見られた（ $B=0.421$, $SE=0.077$, $p<.001$ ）。科目に対する動機づけが高いと、その科目の特定の授業に対する動機づけも高くなることが実証された。さらに、内的調整（T2）（ $B=0.192$, $SE=0.073$, $p<.01$ ）と同一化調整（T2）（ $B=0.173$, $SE=0.085$, $p<.05$ ）に対しては、文脈的動機づけから正のパスが見られた。取り入れ調整（T2）に対しては、状況的動機づけから負のパスが見られた（ $B=-0.149$, $SE=0.073$, $p<.05$ ）。これらは、下位のレベルの動機づけによって、全体レベルの動機づけも変化することを示している。

授業成績に対しては、文脈的動機づけ（ $B=0.311$, $SE=0.116$, $p<.01$ ）と、同一化調整（T2）（ $B=0.288$, $SE=0.110$, $p<.01$ ）から正のパスが見られた。レベルが対応する文脈的動機づけだけではなく、全体レベルの動機づけも学業達成に影響していた。本研究は大学生を対象としたため、学習内容が将来の仕事に必要・役立つといった同一化調整が、特に成績に影響した可能性がある。